に

舌音にして單子音の一つ。

に 荷(名) 荷ひて運送する物。●荷物。

に 丹(名) 古へ赤土を取りて繪の具とせしより起る。◎赤土の色。●黄びかりたる赤色。○「丹塗矢」「丹躑躅」

に 土(名) つち。○「青土」「赤土」

に 瑙(名) 玉。●赤玉。○「八尺瑙」

に 似(名) 似る事。●類似。○「他人の空似」

に 煮(名) 煮る事。●煮たるもの。○「甘煮」「具足煮」「潮煮」

に 尼(名) 比丘尼の略。◎あま。○「僧尼」「禪尼」

に 二(名) 琴三味線の類の二番目の糸。

に 貳(名) 大貳また少貳の略。◎古へ太宰府に置かれし官名。●太宰の次官。

に 耳(名) みゝ。○「心耳をすます」

に 二。貳(數) 〔一〕ふたつ。〔二〕第二番。

に (助) 〔一〕ぬの變化。過去をあらはす詞。○「年立にけり」「過ぎにし春」〔二〕すの意。打消に用ふ。……ぬの轉にやとの説もあり。○「せんすべ知らに」「言へばねに」(雅)

に (後)

〔一〕名詞(又は代名詞)と動詞(又は形容詞)との關係をあらはす。(イ)目ざす物または相對する物の關係を示す。○「神に祈る」「友に話す」「田舍に在り」(ロ)方角の關係を示す。○「西に向ふ」「京都に立つ」(ハ)上に面にの意。○「紙に書く」「壁に紙を貼る」〔二〕内に又は中にの意。○「親戚に軍人あり」「庭に松を植う」(ホ)時にの意。○「朝に道を聽きて夕に死すとも可なり」「日曜に他行す」(ヘ)爲にの意。○「雪に苦しめらる」「風に心を惱ます。(ト)にての意。○御位に橿原の宮に即かせ給ふ」「書を家に讀む」(チ)に於かせられての意。貴人の言語擧動に云ふ詞。……はべりもなどの意とのみ見ても差支なきが多し。○「君には笑ぼせおはします」「東宮にも行啓あらせらるべしとなり」(リ)をの意味に見て差支なきもの。○萬葉「妹に戀ひ」謠曲「鉢の木にすき」(ヌ)とに同じ意味の詞。○「春になる」「風に變る」(ル)よりの意。○「人に別る」「母に叱ら

る」（二）名詞（又は代名詞）と名詞（又は代名詞）との關係をあらはす。（イ）上に面に又はに添ふるにの意。○「机に本」「山に松」「鬼に金棒」「瓜に目鼻」「月に村雲花に風」（ロ）内に中にの意。○「重箱に饅頭」「德利に酒」（三）動詞（又は形容詞）と動詞（又は形容詞）の關係をあらはす。（イ）ごも又は處がの意。反する意の時に用ふ。○「友を訪ひたるに得あはざりき」（ロ）事に物にの意。○「思ふに違ふ」「見るにまさる」（ハ）故にの意。○源氏「いとかくやつれたるにあなづらはしきにや」（ニ）就きての意。○「云々といふにいとあさましし」（ホ）處に上になどの意。○「風の吹くにあたりて」「苔の綠なるに座して」（ヘ）内に中にの意。○「水汲み入れたるに手をひたして」（ト）時にの意。○「夜のふくるにつれて風いよ〳〵寒し」（チ）物をのにの意。○古今「それをだに思ふ事とて我宿を見きとないひそ人の聞かくに」（リ）ばの意。○「夫れつら〳〵おもんみるに」「愚按するに」（ヌ）同じ意の詞を重れて強くいふ時に置く。○「ぬれにぞぬれし」「降りに降る」「入れに入れよ」

切れたる詞の後に置く感詞。○萬葉「白玉もこがれも玉も何せんに」

に（感）

にひィ　新（形）　新らしき。●初めての。

にる　二位（名）　第二の位階。

にひィばり　新墾（名）　新しく開墾したる田。または土地。

にひィばり　新墾（枕）　開墾の地を築きならすの意にて筑波の枕詞。○記「にひばりつくばを過ぎて」

にひィはだ　新膚（名）　男女の初めて互に膚觸れて寢る事。●新枕。○萬葉「にひはだ觸れし子ろしかなしも」

にひィぼ　新穂（名）　新穀の穗。

にひィとし　新年（名）　あたらしき年。●しんねん。

にひィわた　新綿（名）　新製の綿。（新六帖）

にひィたまづさ　新玉章（名）　（一）其人より初めて來たる文。（二）其年もしくは其時節になりて初めて來たる文。○夫木「此秋の新玉章」

にひィたまくら　新手枕（名）　にひまくらに同じ。○源氏「新手枕の心ぐるしくて」

にひィなへ　新嘗（名）　にひなめの轉。

にひィなめ　新嘗(名)　新の嘗の約音。〔一〕昔し十一月中旬の卯の日に天皇陛下を始め人民までも其年の新穀を神に奉り自らも食せし事。〔二〕にひなめまつりの略。

にひィなめまつり　新嘗祭(名)　昔は十一月中旬の卯の日今は十一月二十三日に其年の新穀を神に奉り給ひ。主上御みづからも初めて召しあがる御式祭。

にひィなめさい　新嘗祭(名)　にひなめまつりに同じ。

にひィむろ　新室(名)　新しく建築せし家。◉新宅。

にひィむすび　新結(名)　露霜などの其時節に初めて置く事。○夫木「秋おく露のにひむすび」

にひィくはまよ　新桑繭(名)　にひくはまゆに同じ。(萬葉東歌)

にひィくはまゆ　新桑繭(名)　新しき蠶の繭。○夫木「今年おひの新桑繭の唐衣」

にひィや　新屋(名)　新しき家。◉新宅。

にひィまゐり　新參(名)　しんざん。◉今まゐり。

にひィまくら　新枕(名)　男女初めて互に寢る事。○續千載「忘るなよ結ぶ一夜の新枕」

にひィごろも　新衣(名)　新製の衣服。

にひィさきもり　新防人(名)　上古太宰府に屬する防人に徵せられて行く新兵。○萬葉「今かはる新防人か舟出する」

にいし　丹石(名)　繪の具の名。〔一〕黃土。〔二〕代赭石。

にひィし　(形。形狀言シク活)　あたらしに同じ。

にひィしぼり　(名)　新しく糟からしぼりたる酒の意。◎新釀の酒。◉新酒。

にひィしね　新稻(名)　新に熟したる稻。◉新米。

にひィしまもり　新島守(名)　にひさきもりに同じ。○萬葉「今年ゆく新島守が麻衣肩のまよひは誰か取り見ん」

にひィも　新喪(名)　人の死してまだ幾日も立たぬ喪中。(萬葉)

にひィもの　新物(名)　初物。◉新穀。○夫木「きのふこそ神田の早苗いそぎしか今朝新物の御戸開くなり」

にひィす　新簀(名)　新宅の簀。簀は竹を編みて作れるものゝ總名なれば煙出しなどの處に在るものをも云ふべし。故に下の如き用例あり。○古事記「新簀の煤の八束足るまで焚き凝らし」

にはち 二八(數) 十六。年齢に云ふ。○「二八の美人」

にばな 素花(名) 素のでばな。●出立の素。◎花は假字にて出ばなは出初めたるを云ふ詞。

にばむ (自動四段) 鈍色を帶ぶる。●鈍色が〜る。

にばんぐさ 二番草(名) 第二回目の田の草取。

にはく 二白(句) 手紙の本文を終り我名も他の名宛も濟みたる後に重れて書き出だす時の文句。●二伸。●追啓。●尙々。●かへすがへすも。

にほん 二品(名) 親王の位階。

にほん 二本(名) 昔し武士の腰にしたる大小二本の刀。

にほんざし 二本差(名) 昔し大小二本の刀を差したる故◎武士の異名。

にべ 鰾(名) 〔一〕魚の名。あま鯛に似て頭に二つの石あるもの。〔二〕其魚から採りて製したる膠。

にべん 二便(名) 大便と小便と。

にど 二度(副) 二返。●ふたゝび。

にどう 二冬(名) 詩學上韻字の一つ。……ゐんの處を見よ。

にたゝりうりゅう 二刀流(名) 劍術の一流。宮本無三四の創めたるものにて兩刀を使ふ流義。

にどさき 二度咲(名) 一年に二度咲くの意。◎返り咲。

にち 日(名) 〔一〕ひ。●大陽。〔二〕晝。……夜に對して。○「日夜」「一日遊びくらす」〔三〕一晝夜。日數を數ふる時に云ふ詞。○「一日」「十五日」「三十日」「四十九日」「土曜日」

にちゐき 日域(名)支那より稱へ出だしたる日本の異名。

にちろ 日露(名) 日本と露西亞と。

にちろく 日錄(名) 日々の記錄。●日記。……但し美文にて書きたる日記紀行の類には用ひず。

にちにち 日日(名) 毎日。

にちにちく 日日花(名) 草の名。葉鷄頭。◎日々葉の色の變ずる故に名づく。

にちぼ 日暮(名) 日の暮方。

にちぼつ 日沒(名) 日の入り。●日の入る時刻。●入相。

にちべい 日米(名) 日本と米國と。

にちりん 日輪(名) 天つ日。●太陽。

にちりんさう 日輪草(名) 草の名。日まはり草。◎日輪の廻るに從ひて花を傾くる故の名。

にちよう 日用(名) 日々の要用。

にちえう 日曜(名) 一週間の第一日。

にちようぶん 日用文(名) 日々入用の文章。書簡文證

文受取文の類。

にちようひん 日用品(名) 日々入用の品。衣食住に要する物の類。

にちれんしゅう 日蓮宗(名) 鎌倉時代に日蓮上人の創めたる佛法宗旨の名。法華經を主とする故に法華宗とも云ひ。又此經の題目を唱ふるが故に題目宗とも呼ばる。

にちぐち 日月(名) にちぐわつに同じ。

にちぐつ 日月(名) 日と月と。じつげつに同じ。○謠曲「にちぐわつは地に落ちず」

にちや 日夜(名) 晝夜。●よるひる。

にちげん 日限(名) 〔一〕豫定せし日數。〔二〕約束せし其日。

にちゅう 二重(名) ふたへ。●二層。

にちじん 日神(名) 日の神。●天照大神。○謠曲「日神月神をあがめ申すなり」

にぬ (名) 布の轉。(萬葉東歌)

にぬり 丹塗(名) 赤く塗る事。○記「丹塗の矢」

にぬくも (名) ぬのくもの轉。◎布の如く棚引きたる雲。(萬葉東歌)

にぬき 煮拔(名) 水多くして炊きたる飯の粘り汁。糊などにするもの。

にぬし 荷主(名) 荷物の持主。

にる 似。肖(自動一段) 樣子の或點が互に近づきて見ゆる。●類似する。

にる 煮(自動一段) 物を水に入れて熱するやうに火の上に置く。●焚く。

にほ 鳰(名) 水鳥の名。鴨に似て全體黑く嘴と脚と赤きもの。●異名は……かいつむり。●むぐり。

にほひ 匂(名) 〔一〕色または聲の外に現はるゝ艷。●餘光。●餘韻。○「霞のにほひ」「朝日のにほひ」「聲のにほひ」〔二〕鼻にてかぐ感覺。○「梅が香を櫻の花ににほはせて柳の枝に咲かせてしがな」〔三〕威光。○「君のにほひ」「此御にほひ」〔四〕磨ぎ立てたる刄に現はるゝ一種のあや。〔五〕鎧の威糸の名。薄き色の中に濃き色をぼかしたるもの。○「萌黃にほひ」「つまにほひ」

にほひどり 匂鳥(名) 鶯の異名。

にほひが 匂香(名) にほふところの香。○源氏「うちふるまひ給へるにほひが」

におひうま 荷負馬(名)　荷を負ふ馬。＝にうまに同じ。

にほひのいと 匂糸(名)　にほひにしたる鎧の威糸。……にほひの〔五〕を見よ。

にほひやか 匂のする有樣。●つや〳〵しき有樣。(形)—にほひやかなる。(副)—にほひやかに。

にほひぶくろ 匂袋(名)　麝香の類の匂よきものを入れて身に携ふる袋。

にほどり 鳰鳥(名)　鳰に同じ。

にほどりの (枕)　〔一〕鳰の水を潜くといふ意にてかつしかにかけたる枕詞。○萬葉「にほどりの葛飾早稲」〔二〕又近江の海の枕詞。◎其形の似たる故に形容す。

にほはぬはな (句)　雪を云ふ。○新葉「春も見し同じ梢となりにけり匂はぬ花の雪のあけぼの」

にほはし 匂はし(形。形狀言シク活)　にほひやかなる有樣。

にほはす 匂はす(他動下二段)　〔一〕匂ふやうにする。●匂ふやうにさする。〔二〕ほのめかす。●かすかに知らする。

にほふ 匂ふ(自動四段)　〔一〕色または聲の外に艶の現はるゝを云ふ。〔二〕鼻の感覺に觸るゝを云ふ。

にわうだち 仁王立(名)　仁王の像の如き威勢にて立つ事。

にわうそん 仁王尊(名)　仁王の尊稱。

にわうもん 仁王門(名)　仁王の像を左右に置き守護する寺の門。

にほやか 匂やか(自動四段)(枕)　匂ひ照るの意。……但し鳰の海を照らすと云ふ意味に掛けて何れも近江湖水近傍の形容もしくは枕詞とす。○永久百首「にほてるや矢走のわたり」新後拾遺「にほてる海」續後撰「辛崎やにほてる沖」月清集「にほてる月」拾玉集「粟津野の尾花よ風に散りやらでにほてる露は螢なりけり」謠曲「にほてる比叡」

にほてる 仁王(名)　佛法を守護する多力の神。右なるを那羅延金剛といひ。左なるを密迹金剛といふ。(佛教)

にたもひ 醤(名)　煮御水(にたもひ)の意。◎煮立たして冷したる

水。●湯ざまし。

には。 庭(名)　〔一〕邸宅・園内の空地。●園。●前栽。〔二〕場所。○「屋庭」「軍の庭」「政の庭」「法の庭」「講の庭」「別れの庭」〔三〕海面。○萬葉「あへて漕ぎ出ん庭も靜けし」

にはいし 庭石(名)　庭の裝飾に据うる岩石。

にはにわふる 庭生(名)　催馬樂の曲名。

にはとり 庭鳥。鶏(名)　紅色の兜を持ち毛色美しく尾長く人家に飼はれて時を告ぐる鳥。肉も卵も食用に供せらる。かしはしゃも等の種類あり。

にはたたき 接骨木(葉)　灌木の名。葉はよく繁茂して夏白き花さき秋赤く豆に似たる實を結ぶ。

にはたづみ 庭帳(名)　年貢を記錄する帳面。

にはか 俄(名)　〔一〕急。●突然。△(形)―俄の。(又)―俄なる。(副)―俄に。〔二〕即席に趣向を附けてする藝。……多くは滑稽的にて終にシャレの落あるもの。

にはたづみ 庭隱(自動下二段)　庭の陰に隱るゝを云ふ。○六帖「庭がくれてもにほひあるかな」

にはがくる 俄分限(名)　俄に身分よく爲りたる事。●俄に富みたる事。

にはかあめ 俄雨(名)　俄に降り出す雨。

にはかびより 俄日和(名)　俄に晴れたる天氣。

にはだち 庭立(名)　〔一〕禁裡の庭上に立ちて音樂を奏する事。○江次第「萬機の初旬。日晩といへども必ず庭立あり」〔二〕以上の意味にて還立の事をも云ふ。○神中抄「もろこしの屏風の畫にも見てきあれば我皇神の庭立のよさ」

にはたたき (名)　鶺鴒の異名。◎庭を尾にて叩く如き働する故の名。○拾遺雜草「さらぬだに霜がれはつる草の葉をまづ打ち拂ふ庭たゝきかな」

にはたづみ 潦(名)　雨の後など庭に溜りたる水。○風雅「月うつる眞砂の上の庭たづみ跡まですゞし夕立の雨」

にはたづみ (枕)　庭たづみの如く流るゝと言ひかけたる枕詞。○萬葉「庭たづみ流るゝ涙とゞめかねつる」

にはつとり 庭つ鳥(名)　庭に飼ふ鳥。●鶏。

にはつつ (名)　虫の名。斑猫(はんめう)。(和名抄)

にはつくり 庭作(名) 築山泉水など作る職人。●庭師。

にはなべ (名) 新嘗(にひなべ)の轉。(萬葉)

にはなか 庭中(名) 庭の内。

にはうめ 庭梅(名) 灌木の名。春梅に似て白く小さき花咲き。夏赤く玉の如き實を結ぶ。●小梅。●郁李。

にはのともしび 庭燈(名) 七夕祭の夜庭上に手向くる燈火。その數は七つなり。○夫木「秋毎に絕にぬ星合の小夜ふけて光ならぶる庭の燈火」

にはのり 庭乘(名) 馬場ならず庭にて馬を乘る事。

にはのをしへ 庭訓(名) 孔子の庭上にて伯魚を教誡せし古事より出でゝ。◎家訓。=ていきんに同じ。

にはのわも 庭面(名) 庭。●庭上。

にはのざ 庭の座(名) 賀茂の臨時祭など終りて伶人禁中に還り庭上にて奏樂し宴など賜ふを云ふ。=還立に同じ。

にはくなぶり (名) 鵜領の古名。

にはくさ 庭草(名) (一)庭に植うる草の總名。(二)簾草の一名。

にはなやぎ 庭柳(名) (一)庭に生ふる柳。(二)草の名。路傍の草にて夏蓼に似て白き花さくもの。一名岩柳とも云ふ。

にはふぢ 庭藤(名) 岩藤の一名

にはこ 庭子(名) 農家に使はるゝ奴婢の夫婦を爲り生みたる子が其主家に又使はるゝもの。

にはこぶ 庭籠(名) 鳥を飼ふため庭に据ゑ置く籠。

庭瘤(名) 平面なる庭に瘤の如く自然に出來たる高き處。

にはざくら 庭櫻(名) 庭に植ゑたる櫻。

にはみぐさ 庭見草(名) 萩の異名。

にはし 庭師(名) 庭作(はつくり)に同じ。

にはび 庭火(名) (一)庭上にて焚く火。……多くは禁中または神社にて神樂の時焚くものを云ふ。○永德百首「庭火たくあたりの霜も打ちとけて神もきくらん朝倉の聲」(二)神樂の曲名。

にはもせ 庭も狹きほど。△(形)—庭もせの。(副)—庭もせに。○「庭もせに散る」「庭もせに咲く」

にかい 二階(名) (一)たかどの。(二)厨子の棚。

にがいろ 苦色(名) 裝束の重の色目。表濃き香。裏二

にがにがし 苦々し(形。形状言シク活) 不愉快なる有様。◆困難なる有様。●迷惑なる有様。○狂言「是ばにがにがしい事で御座る」

にがにし 苦螺(名) 貝の名。殼の色は黄白にして赤みを帶び肉は赤螺に類す。外に短き褐色の角あり。

にがち 苦茶(名) 苦味ある茶。

にがり (名) にがしほに同じ。

にがりきる (自動四段) 甚しくにがる。

にがる 苦(自動四段) にがむに同じ。◆苦い顔をする。◆苦々しく思ふ。

にがほ 似顔(名) 〔一〕甲の顔付の乙に似たる事。〔二〕似顔繪。

にがほゑ 似顔繪(名) 其人の顔に似せたる繪。◆肖像。

にかは 膠(名) 煮皮の意。◎牛の皮を煮て採りたる液を固めたるもの。物を粘着せしむるに用ふ。

にがわらひ 苦笑(名) 苦々しく笑ふこと。●不愉快なる時顔にのみ笑を示す事。◆冷笑。

にがわらふ 苦笑(自動四段) にがゝしく笑ふ。

にかよふ 似通(自動四段) 甲と乙と互によく似る。

にがたけ 苦竹(名)竹の一種。

にがな 苦菜(名) 〔一〕龍膽。〔二〕たんぽゝに似たる花の咲く路傍の小草。

にがむ 苦(自動四段) 苦い顔付をする。◆苦く思ふ。◆くるしがる。◆いやがる。

にがむ 苦(他動下二段) 顔をしかむる。

にがうり 苦瓜(名) 瓜の一種。れいしの一名。

にかく 二覺(名) 〔一〕一に本覺。二に始覺(起信論)〔二〕一に自覺。二に他覺。(翻譯名義集)……(佛教)

にがし 苦(形。形狀言ク活) 〔一〕熊の膽を嘗めたる時に起る味覺の感じ。〔二〕心に苦痛ある時の感じ。又は事の困難なる有様にも云ふ。

にがしほ 苦鹽(名) 鹽より滴る苦味の液。◆にがり。

にがす 逃(他動四段) 逃げしむる。●逃れしむる。

にい 如意(名) 公卿の笏の如く僧の手に持つ道具。◎もとは孫の手の用に供せしものなれば意の如く痒きを搔くといふ意味より起りしと云ふ。〔圖〕

にいはうじ 如意寶珠(名) 佛書中にある靈妙の藍。

玉。多くは龍の腦中にありて一名を摩尼珠と云ふ。此珠を得るものは毒も害する能はず火も燒く能ばざるの功德あり。故に如意と名づく。

にょいりん 如意輪(名) 如意寶珠に同じ。

にょいりん 如意輪(名) 如意輪觀音の略。(枕)

にょいりんくわんおん 如意輪(名) 六觀音の一つ。手六つありて如意輪寶珠を持つ故の名

【圖】

にょいしゅ 如意珠(名) 如意寶珠に同じ。

にょろにょろ (副) 蛇、蚯蚓の如きものの這ふ有樣。(又) ―にょろにょろと。

にょにん 女人(名) 婦人。

にょにんだう 女人堂(名) 女のみ參りて神佛を拜する堂。維新前は神佛混合なりしかば神社佛閣に女人の入るを禁制せし處あり。よりて境外に一の堂を立てゝ女人に參拜の便を與へしなり。

にょにのみや 女二の宮(名) 第二の皇女。●をんな二の宮。

にょぼん 女犯(名) 邪淫戒を犯して女と交る事。(佛教)

にょほふ 如法(形)(副) 全く。●かたの如く。●もとより。●誠に。○保元「十一日の如法夜ふけて」盛衰「如法危く見なければ」(又)―如法に。(形)―如法の。

にょべたう 女別當(名) 齋宮齋院の女官。

にょとうぐう 女東宮(名) 東宮に立ち給ひし皇女。

による 似寄(自動四段) 類似する。

にょわう 女王(名) 〔一〕女の國王。〔二〕天皇の御後裔にて四世までの女性の皇族。

にょわうろく 女王祿(名) 女王に祿を賜ふ事。昔は正月八日禁中にて此式あり。……わうろくを見よ。

にょたい 女體(名) 女の身。●女。

にらい　如來(名)　佛に同じ。○「釋迦如來」「大日如來」

にらいだう　如來堂(名)　如來を安置したる堂。○「善光寺の如來堂」

にょむげんはうやう　如夢幻泡影(句)　夢や幻や泡や影の如く有るかと見れば忽に消ゆるはかなき事の喩へ。(佛教)

にょふ　呻(自動四段)　うなる。●うめく。○徒然「腰切り損ぜられて日なし原にによび伏したるを」

にょうぬん　女院(名)　天皇の母后にして佛門に入り門院號を奉られ給ひし御方の稱。昔し一條天皇の御母后藤原詮子に東三條院を奉られ。尋いて藤原彰子上東門院と號ぜられしより創まる。

ねうはち　鐃鈸(名)　佛事の時兩手にて打ち鳴らす金屬製の器

【圖】

にょうばう　女房(名)　女の住む房の意より出で〻尊稱に用ひらる。◎〔一〕禁中の女官。または貴族の家の侍女。○「家の女房」「上の女房」〔二〕女の美稱。●婦人。●女中方。○「女房の歌よみ」〔三〕妻。○「世話女房」

にょうばうことば　女房言葉(名)　禁中の女官又は御殿女中の用ふる言葉。豆腐をおかべ、鮮飯をすもじといふの類。今も女言葉として行はるゝもの。

にょうごや　女御屋(名)　女御の住み給ふ家。(榮花)

にょうくわん　女官(名)　ぢょくわんに同じ。●官女。

にょうご　女御(名)　中宮の次に位する女官。おもに大臣の女これに任ず。

にょうごだい　女御代(名)　準女御の意。女御の無き時之に準じたる資格の女官。

にょうじゅ　女孺(名)　卑き役の女官。

によく　二沃(名)　詩學上韻字の一つ。……ゐんの處を見よ。

にょくらうど　女藏人(名)　卑き役の女官。

にょごのみや　女五の宮(名)　第五の皇女。●をんな五の宮。

にょごのしま　女護島(名)　想像に起りたる島の名。女のみ住む處を云へり。八丈島などを左樣に想像せしもの〻如し。

にょてい　女帝(名)　女性の天皇。

にょさんのみや 女三の宮(名) 第三の皇女。●をんな三の宮。

にょぎ 女儀(名) 女を尊びて云ふ詞。●婦人。

にょし 女子(名) 〔一〕女の小兒。〔二〕女。

にょじょい 女叙位(名) 女官の位階に叙せらるゝ事。昔は正月八日に此式あり。

にょしょう 女性(名) 女。……婦人方といふ位。すこし尊びたる詞。○謠曲「女性の御身として」

にょぜ 如是(形)(副) 佛經の詞かくの如き。又かくの如く。○「如是畜生」「如是我聞」

にだ 荷駄(名) 荷馬。

にたい 二諦(名) 一に俗諦。二に眞諦。(佛教)

にたり 荷足(名) 荷を積みて川を上り下りする小舟。

にたり (名) 似たる故の名。◎牛の角を以て玳瑁に擬し作れる品。

にたり (助動) 過去の詞のにとたりとを重ね云へる詞。○思ひ離れにたり」

にだんぐせ 二段曲(名) 謠曲に云ふ詞。クセは通例一段なるに其二段あるもの。

にたやまたり 仁田山織(名) 上州仁田山より産する織物。

にたやまもめん 仁田山木綿(名) 上州仁田山より産する木綿。

にたき 煮焚(名) 食物を煮たり焚いたりする事。

にだし 煮出(名) 煮出しにしたる煮出汁の略。

にだしじる 煮出汁(名) 鰹節を煮出して味を附けたる汁。

にだす 煮出(他動四段) 鰹節にて味を附け煮る。

にれ 楡(名) 木の名。寒地に生じて葉は櫻に似、春の頃花さき後實を結ぶもの。

にれ (名) 牛馬の食ひたる草を吐き出だして再び食ふ事。○徒然「にれうちかみで伏しけるを」

にれがむ (他動四段) 牛馬の食ひたる草を吐き出だし再ひ食ふをいふ。

にそう 二宋(名) 詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

にざう 二藏(名) 一に聲聞藏。二に菩薩藏。(佛教)

にそくさんもん 二束三文(名) 殆んど價の無き程廉なる事。

にっぱい 日牌(名) 死者の靈前に日々物をそなへて供養する事。

にっぱい 日拜(名) 神または佛を毎日拜禮する事。●毎

日すべき神佛の拜禮。

にっぽんいち 日本一(副) 第一上等などいふ程の意味。○謠曲「日本一鳥帽子が似合ひ申して候」△(形)—日本一の。○謠曲「日本一の御機嫌にて候」

にっぽんばれ 日本晴(名) 上等の快晴。

にっぽん 日東(名) 日本の異名。

にったう 入唐(名) 昔し唐の代の頃支那に行く事。● 渡唐。○「入唐渡天」

にっちう 日中(名) 〔一〕日の眞中。● 正午。〔二〕晝の間。……夜中の對。

にっちうぎやうじ 日中行事(名) 日々刻限を定めて行ふべき公事。……おもに其次第等を記したる書きもの。

につかはし (形、形狀言シク活) 似付くを働かしたる詞。◎● 似合はし。● 相應なる。● 適當なる。

にっかん 日韓(名) 日本と朝鮮と。

にったいそく 日帶蝕(名) 日蝕に同じ。

にったをり 新田折(名) 折烏帽子の一種、新田家にて用ふるもの〈圖〉

にっそく 日蝕(名) にっしょくに同じ。

につつじ 丹躑躅(名) 赤き花の躑躅。

につむ 煮詰(他動下二段) 水分の無くなるまで煮る。

につく 似付(自動四段) 似合ふ。● 相應する。● 適當する。

につく 煮付(他動下二段) 煮る。● 煮つける。

にづくり 荷造(名) 荷ごしらへ。

にっくわ 日課(名) 日の課業。

にっくわう 日光(名) 日の光。● 日影。

にっくわうたがらし 日光唐辛子(名) 紫蘇卷き燒唐辛子の事。◎もと下野日光の名產なりしより云ふ名。

にっくわうらふせき 日光蠟石(名) 下野の日光より足尾銅山邊に掛けて出づる蠟石の名。

につけ 煮付(名) 煮たる食物。多くは魚の事に云ふ。○「鯛の煮付」

にっこり (副) にこりに同じ。(又)—にっこりと。

にってんし 日天子(名) 二十天の一つ。佛書に云ふ日の神。

にっさん 日參(名) 日々の參詣。

にっさうくわん 日相觀(名) 彼岸の中日には夕日回轉

して波に沈むとて高き處より之を望むを云ふ。○謠曲「日相觀を拜み候へ」

にっき 日記(名) 日々の記錄。●日誌。●記錄。

にっきん 日勤(名) 日々の出勤。

にっきふ 日給(名) 〔一〕日々の給料。●日當。〔二〕日給の簡の略。

にっきふのふだ 日給簡(名) 昔し禁中殿上にて侍臣の當番非番を記して張り付けたる紙の札。

にっし 日子(名) 日數。

にっし 日誌(名) 日記に同じ。……但し美文的のなば稱へず。

にっしょく 日蝕(名) 太陽と地球との間に月が挾まれたる爲め其陰になりて地球に達する日光の暗くなる事。

にっしん 目淸(名) 日本と淸國と。

にっしん 日新(名) 日々物事の新しくなる事。

にっしん 二進(名) 珠算に云ふ詞。二を進めて位を上ぐる事。

にっしゃう 日章(名) 日の丸。……國旗に附くる印。

にっしゃう 入聲(名) 漢字字音の稱。……韻の處を見よ。

にっしゃうき 日章旗(名) 日の丸の旗。

にっしゅつ 日出(名) 日の出。

にっすう 日數(名) 日かず。

にねん 二念(名) 二心に同じ。ふたごゝろ。

にな 蜷(名) みなの轉。◎貝の名。田螺に似て一方は尖り一方は廣くなりたる殼を有し溝川などに住むもの。

になひぃ 擔(名) になひをけの略。

にないろ 蜷色(名) 中古裝束重(かさね)の色目。表黃に裏靑。

になひぃぼう 擔棒(名) 桶の類を擔ふ棒。

になひぃをけ 擔桶(名) 水を汲みて擔ふ桶。

になむすび 蜷結(名) 紐の結び方。〔圖〕

になふ 擔(他動四段) かつぐ。

になし (形。形狀言ク活) 二と無きの意。◎ふたつなし。●たぐひなし。●比なし。

にら 韮(名) 野菜の名。葱に似たる匂ありて葉は平たく厚きもの。

にらむ 睨(他動四段) 見詰める。●目を怒らして見る。

にらみくら 睨競(名) 睨みくらべの意。……にらみあひの〔二〕に同じ。

にらみあひぃ 睨合(名) 〔一〕互に睨み合ふ事。〔二〕互

に睨みつめて先に笑ひたるを負とする小兒の遊戯。〔三〕敵視する事。

にらみあふ（ふ）　睨合（自動四段）　〔一〕互に睨む。〔二〕敵視する。

にらまふ（ふ）　（他動下二段）　にらもの延音。○「そなたをにらまへ」

にん　任（名）　〔一〕人たるもの、役目。○「國に死するは臣下の任」〔二〕官より命ぜられたる役目。○「任に赴く」

にん　忍（名）　しのぶ事。●忍耐。●忍辱。

にん　仁（名）　植物の實の肉。○「桃仁」

にん　妊（名）　孕む事。●妊娠。

にん　認（名）　みとむる事。

にん　任意（名）　心まかせ。●適宜。

にんい　忍辱鎧（名）　袈裟の一名。（佛教）

にんにくのよろひ　人馬（名）　人と馬と。

にんば　任果（名）　昔し地方官の任限の滿期に爲るをいふ。○宇治「任果の年」

にんはて　大蒜（名）　野菜の名。葱に似て匂あり。風引きたる時粥に雜へ煮てよく人の食ふもの。

にんにく　忍辱（名）　耻辱を與へられても忍びこらふる事。（佛教）

にんにく

にんべつ　人別（名）　〔一〕何にても一人々別々にする事。……賦役に任じ戸籍に名を記す等の類。〔二〕戸籍に記さるゝ人口。

にんべつちやう（ちやう）　人別帳（名）　戸籍帳。

にんべん　人偏（名）　漢字の偏の名。仁信何倫等の左の部分。

にんとう　人頭（名）　人數に同じ。

にんどう　忍冬（名）　蔓草の名。夏の初め朝顏なりの白く小さく香ある花さくもの。

にんだう　人道（名）　六道の一つ。死者の更に生れゆく人間界。

にんち　任地（名）　赴任する土地。

にんぢやう（ちやう）　人長（名）　禁中の御神樂を勤むる伶人の長。

にんぢやう（ちやう）　人定（名）　人の寢靜まる時刻。即ち夜の十時。

にんぢやうしよう（ちやう）　人定鐘（名）　寢ようとの鐘。すなはち十時を報ずる鐘。

にんわう　人皇（名）　神武天皇以後の時代。……神代に對して。

にんわゥゑ 仁王會(名) 仁王經を講ずる佛事。昔し禁中にて三月と七月とに行はれたるもの。

にんわゥぎゃうキョウ 仁王經(名) 佛經の名。仁王護國般若經の略。

にんわゥらく 仁和樂(名) 雅樂の曲名。光孝天皇の仁和年中に出來たるもの。

にんか 認可(名) 認めて許可する事。

にんがい 人界(名) 人間世界。

にんよう 任用(名) 人を官職に任じ用ふる事。△(動)—任用す。

にんたい 忍耐(名) たへしのぶ事。●こらへる事。●辛抱する事。△(動)—忍耐す。

にんたい 人體(名) 人柄。●人品。

にんたいにんさッう 人相(名)・〔一〕人の顏附に現はれたる相。〔二〕それを見て未來の吉凶を判斷する術。

にんさッうがき 人相書(名) 其人の人相を明細に書く事また其書きたるもの。……「顏丸く色淺黑く、目大きく、口廣く、頰に黑子(ほくろ)あり」などの類。おもに罪人行倒れなど搜索する時に用ふ。

にんさッうめがね 人相目鏡(名) 人相見の持つ目鏡。

にんさッうみ 人相見(名) 人相の吉凶を判斷する人。

にんそく 人足(名) 人夫。

にんむ 任務(名) 責任。●つとめ。

にんぐわい 人外(名) 人間の道にはづれて居る事。△(形)—人外の。(副)—人外に。

にんくわん 任官(名) 官に任ずる事。●拜命。

にんげん 人間(名) ひと。

にんげん 任限(名) 在官の期限。

にんげんかい 人間界(名) 人の世界。

にんぶ 人夫(名) 役夫。●人足。

にんぷ 妊婦(名) 懷妊せる女。

にんぶつふに 人佛不二(句) 人間も佛も結局は二物なりざるの意。○謠曲「人佛不二の御心にて」(佛教)

にんこく 任國(名) 昔し地方官の赴任する國。

にんてい 認定(名) 認めて可と定むる事。

にんてい 人體(名) にんたいに同じ。

にんでん 人天(名) 人道と天道と。●人界と天國と。(佛教)

にんき 人氣(名) 人の氣合。●人の氣風。●人民の景氣。

にんぎょ 人魚(名) 顔は女人に似て腰より下は魚に爲りたるといふ想像の動物。

にんけふ 任俠(名) 男立。●俠客肌。●俠氣。

にんぎょう 人形(名) 人間の形に造りたる土製または木製のもの。

にんぎつかひ 人形使(名) 人形芝居の人形を使ふ人。

にんぎうて 人形手(名) 唐子人形の摸樣を染めたる更紗。

にんぎうしばゐ 人形芝居(名) 人が人形を使ひて演ぜさする芝居。

にんめい 任命(名) 任官の命令。

にんめん 任免(名) 任官と免官と。

にんめんさう 人面瘡(名) 腫物の名。膝に生じて人の顔に似たる形を現はすものと云ふ。

にんめんじうしん 人面獸心(句) 人の顔は持ちて居ながら獸の如き心を持ち又は行を爲すの意。●人非人。

にんしょ 任所(名) 赴任する場所。‖任地に同じ。

にんじゃう 人情(名) 人の心。●情。●なさけ。

にんじゃうぼん 人情本(名) 男女の間の痴情を寫すを主とせたる小說。……「梅曆」「娘節用」の類。

にんしん 任娠(名) 孕む事。●懷妊。●懷胎。

にんじん 人參(名) 草の名。莖は直立し葉はうこぎに似て鋸齒あり。根を藥に用ふ。

にんじんざ 胡蘿蔔(名) 野菜の名。根は大根に似て細く長く赤し。之を食用とす。

にんじんざ 人參座(名) 德川時代に舶來の人參を取扱ひたる處。

にんじゅ 人數(名) にんずに同じ。

にんじつ 忍術(名) 忍びの術。●形を隱す一種の兵術。

にんじゅだて 人數立(名) 禁中の節會御神樂などに。天皇別殿に行幸せさせ給ふ時。殿上人脂燭を執り。主殿寮の官人松明を執りて供奉するを云ふ。

にんびにん 人非人(名) 人間にして人間にあらざる行をする人。●人でなし。

にんせん 人選(名) 人物の良否を選擇する事。

にんず 人數(名) 〔一〕ひとのかず。●人員。〔二〕多人數の略。

にんず 任(自動サ變) 引き受けてする。●責任を帶ぶ

る。

にんず 任（他動サ變）〔一〕まかす。●委任する。〔二〕官を命ず。

にう ニュウと發音する詞はにゆの順にあり。

にうり 煮賣（名）食物を煮ながら賣る事または賣る人。

にうりや 煮賣屋（名）煮賣をする家。

にうりざかや 煮賣酒屋（名）煮賣を肴にして酒を飲まする家。料理屋の下等なるもの。

にうま 荷馬（名）荷を附けたる馬。

にのほ 丹穂（名）赤く色つきたる稻の穗。（古）

にのを 荷緒（名）荷を結び固めたる繩。……多く貢物に云ふ。○祝詞式「陸よりするは荷の緒ゆひかため」

にのつづみ 二皷（名）雅樂の樂器。形は一の皷の如くして今少し小さきもの。

にのく 二の句（名）短歌の上の句の七文字のところ。

にのまひ 二の舞（名）〔一〕舞樂の詞。一段終りて又更に繰返し舞ふ二段目の曲。○「安摩の二の舞」「東遊の二の舞」……安摩の二の舞に用ふる假面は額の邊など腫れたるやうに膨れて如何にも見苦しき形なれば人の顏の腫れたる形容に用ふ。○徒然「目眉額なども腫れまどひて打ち覆ひたれば物も見えず。二の舞の面のやうに見えけるが」〔二〕安摩の二の舞は一の舞の眞似をして舞ふ滑稽の舞なれば他人の所爲を摸擬する事の喩に云ふ。○狹衣「隱笠の中納言の二の舞にやあらん」

にのまち 二の町（名）昔し禁中の局町に一の町二の町などいふがありて位の高下に依り女官は一の町より次第に住む事なりしかば是より出でたる詞。◎第二番目に位する事物。●第一等ほど重要ならぬ事物。●二の次。○源氏「是は二の町の心やすきなるべし」

にのまる 二の丸（名）城の郭内の稱へ。大將の居る處を一の丸といひ之に次ぐ處を二の丸と稱ふ。

にのまつ 二の松（名）能舞臺の橋掛に植ゑたる松の名稱。舞臺の方より數へて第二番目のを云ふ。……一の松を參考せよ。

にのあし 二の足（名）歩み出して二番目に踏み出す足……躊躇する事を「二の足踏む」と云ふ。

にのみや　二の宮(名)　〔一〕其國中にて第一の宮の次に位する社。〔二〕第二の皇子。或は皇女。

にのぜん　二の膳(名)　正式の饗應に出だす第二番目の膳。

にのぜんつき　二の膳附(名)　二の膳の附き加はりたる正式の饗應。

にく　肉(名)　〔一〕物の皮膚と骨との間にありて筋を含み持つもの。……轉じては皮膚をも云ふ。〔二〕基督教にては肉身の意味より轉じて世俗的と云ふ意に用ふ。〔三〕菓野菜などの皮の中にある食ふべき部分。〔四〕物の厚さ。○「板の肉」〔五〕書きたる文字の筆つき。○「肉ぶと」「肉ぼそ」〔六〕印肉。

にく　褥(名)　〔一〕しとね。〔二〕獸の名。羚羊(かもしか)。

にぐ　逃(自動下二段)　のがる。●にげる。

にくいろ　肉色(名)　人の肉に似たる色。●黄を帶びたる薄桃色。

にくいれ　肉入(名)　印肉を入るゝ器。

にぐろめ　煮黑(名)　百匁の銅に三十匁のしろめを加へて溶かしたるもの。

にくにくと　(副)　にくらしくに同じ。

にくにくし　(形。形狀言シク活)　にくらしに同じ。

にくぼそ　肉細(名)　文字の筆つきの細さ。△(形)―肉細の。(副)―肉細に。

にくべい　肉餅(名)　蒲鉾(かまぼこ)の事。

にくち　肉池(名)　印肉を入るゝ器。

にぐるま　荷車(名)　荷を積みて運ぶ事。

にぐわつ　二月(名)　年の第二番目の月。●きさらぎ。

にくがる　(他動四段)　にくむ。●にくゝ思ふ。

にくがん　肉眼(名)　生(しやう)の眼。……眼鏡を掛けざる眼を云ふ。

にくよく　肉慾(名)　肉體の情慾。●世俗的情慾。(基督教)

にくたい　肉體(名)　目に見ゆる身體。……靈魂に對して云ふ。

にくたらし　(形。形狀言シク活)　にくらしに同じ。(俗)

にくづく　肉附(自動四段)　漸々肉の附きて來るを云ふ。●肥にてくる。

にくづき　肉月(名)　漢字の偏の名。胸、腹、胴、腰などの文字の左の部分。◎形は月の字なれど實は肉の字の略なれば云ふ。朧、腦などの加き眞の月の字の偏に對して。

にぐら 荷鞍(名) 荷馬の鞍。

にくらかし にくくしに同じ。(形)—にくらかなる。(副)—にくらかに。(源氏)

にくらし (形。形狀言シク活) 憎くある有樣。

にくむ 憎。惡。疾(自動四段) にくゝ思ふ。●かわゆくなく思ふ。◎忌み嫌ふ。

にくむにくむ (副) にくみながら。

にぐう 二宮(名) 〔一〕東宮と中宮。(公事根源)〔二〕仆勢の內宮と外宮。

にくまれぐち 憎まれ口(名) 人に憎がらるゝやうの言語。

にくッけい 肉刑(名) 人の肉體を傷つくる刑罰。……いれすみ耳きりの類。

にくッけい 肉桂(名) 藥用に供する桂の木の皮。

にくげごと (名) にくまれ口。(枕)

にくぶと 肉太(名) 文字の筆つきの太さ。△(形)—肉太の。(副)—肉太に。

にくてい 憎體(名) 憎らしき體。△(形)—にくていなる。(副)—にくていに。

にくあャひィ 肉合(名) 人體の肉のあんばい。●やせふとり。

にくさ 憎さ(名) にくき事。

にくさい (名) にくさびに同じ。(色葉集)

にくさげ 憎さ氣(名) にくていなる有樣。

にくさみ (名) にくさびに同じ。(能因歌枕)

にくさし 肉刺(名) 西洋料理の食器。左手に持ち肉を刺して食ふ三叉のあるもの。

にくさび (名) 荷楔(にくさび)の意にや。◎波の抵抗を和らかにするため船の端を藁にて包む事。○天本「にくさびうかくべかりける難波瀉舟打つ波にいこそ駐られぬ」

にくみ 憎(名) にくむ事。

にくし 惡。憎(形。形狀言ク活) 〔一〕かわゆくない。〔二〕がたし。○「見にくし」「言ひにくし」

にくし、く 肉食(名) 動物の肉を食用とする事。

にくしん 肉親(名) 血の續きたる近親。

にくじき 肉食(名) にくしょくに同じ。○「肉食妻帶」

にくしみ (名) 憎みに同じ。○「にくしみを受く」

にくひつ 肉筆(名) 其人の自ら書きたるまゝの書畫。……木板。若くは石板にしたる物ならぬを云ふ。

にやにや (副) 笑ふとも無しに笑ふやうなる有樣。○

「にやにや笑ふ」（又）—にやくと。

にやっこ 煮奴（名） 煮たる奴豆腐。

にゃける （自動下二段） 柔弱にして色氣を含む有様。（俗）

にまんさうみゾミョ**うぶつ** 二萬燈明佛（名） 萬行と萬善との二德を兼ね備へたる佛。

にまめ 煮豆（名） 大豆または黑豆を煮染めたるもの。

にまめや 煮豆屋（名） 煮豆を賣る家または人。

にまぜ 煮雜（名） 雜炊。

にげだす 逃出（自動四段） 〔一〕逃げ出づる。〔二〕逃げはじめる。

にげなし 似氣無（形。形狀言ク活） 似合はしからず。● 不釣合な。

にげんきん 二絃琴（名） 糸二筋の琴。● 八雲琴。

にげのく （自動四段） 逃げ退く。● のがれ去る。

にげこうじゃショ**う** 逃口上（名） 言拔の言葉。● にげことば。● 遁辭。

にげあし 逃足（名） 逃げる足づかひ。

にげめ 逃目（名） 逃げんとする目附。（源氏）

にげみち 逃路（名） 〔一〕逃げ去る路。〔二〕逃げ去る方法。

にげみつ 逃水（名） 昔し遠く武藏野を望めば。若草の末のちらちらと動くさま恰も水の流るゝ如くに見ゆ。近づけば水無く遠ざかれば又その如く見ゆたるを云へり。○散木「東路にありといふなる逃水のにげかくれても世をすごすかな」

にげじり 逃尻（名） 逃げんとして既に其方へ向けたる尻。

にふ ニュウと發音する詞はにゆの順にあり。

にぶいろ 鈍色（名） にびいろの轉。

にぶる （自動四段） 鈍くなる。

にふだ 荷札（名） 荷物に附くる札。

にぶつのちゅうげん 二佛の中間（句） 釋迦佛は既に滅し彌勒佛は未だ世に出でざる間を云ふ。即ち今日の世の中にて衆生の迷多き頃。（佛教）

にぶね 荷船（名） 荷物を積みたる舟。又之を積むべき船。

にぶむ （自動四段） にばむに同じ。

にぶさ （名） にぶき事。

にぶきん 二分金（名） 昔し通用せし金貨。今の五拾錢に當るもの。

にぶし（形。形狀言ク活）〔一〕刄物のよく切れぬ有樣。〔二〕人の魯鈍なる有樣。●のろい。

にご　和。柔（形）　なぎなごにぎなど皆同語。◎やはらかなる。●精緻なる。……粗なるの反對。●熟したる。

にこにこ（副）　顏に笑を含みたる有樣。●にこやかに。

にこにこと（副）　にこにこに同じ。●にこやかに。

にこり（副）　にこ〳〵に同じ。

にごり（濁ノ名）　〔一〕泥、塵、また他の色素のために流動物の汚るゝ事。〔二〕惡事または迷心のために他の純粹物の汚るゝ事。〔三〕濁音の印に附くる二重點。

にごりゐ　濁井（名）　濁りたる井。（夫木）

にごりと（副）　にこ〳〵に同じ。

にごりなきよ　濁無き世（句）　淨土●。佛の國。

にごりぐち（名）　船に荷を積み入るゝ處の入口。

にごりは　濁江（名）　濁りたる江。（順集）

にごりざけ　濁酒（名）　糟を漉さぬまゝにて飲用に供する酒。●もろみ。

にごりみづ　濁水（名）　濁りたる水。（拾遺）

にごる　濁（自動四段）　〔一〕泥、塵または他の色素のために流動物の汚さるゝ。〔二〕惡事または迷心のために他の純粹物が汚さるゝ。〔三〕清音の濁音となる。

にごよ　和世（の）　昔し六月の大祓の時神祇官より奉りし御贖物の御衣の名。二種ありて一つを和世といひ一つを荒世と稱ふ。

にこよか　にこやかに同じ。

にごらす　濁（他動四段）　にごすに同じ。

にこむ　煮込（他動四段）　〔一〕物を色々雜へ煮る。〔二〕充分に煮しめる。

にごむ　和（他動四段）　やはらぐ。＝なごむに同じ。

にかこう　二更（名）　夜の十時。

にがふり　二合（名）　●昔し二字の名乘を書くに上の一字を普通の書体にし下の一字を花押の体にして二字を一字の如く書く事。

にこぐさ　柔草（名）　やはらかき草。●若草。（萬葉）

にこやか　和やかの意。◎ものやはらかに笑を含む有樣。△（形）—にこやかなり。（副）—にこやかに。

にこげ　柔毛（名）　やはらかき毛。●鳥獸のむくげ。

にごり（名）　魚など煮たる汁の凝結したるもの。

にごみ　煮込（名）　〔一〕煮込む事。〔二〕其煮たるもの。

○牛の煮込「おでんの煮込」

にごしね　和稲(名)　にぎしねに同じ。

にごしらへ　荷拵(名)　荷づくり。

にごもの　柔物(名)　やはらかき物。○祝詞式「毛のにごもの」

にごす　濁(他動四段)　濁らしむる。

にこずみ　和炭(名)　消炭(けしずみ)の古名ならんと云ふ。

にへ　贄(名)　新嘗(にひなへ)の約。◎あたらしき食物。……おもに天皇又は神に奉る鳥魚をいふ。

にえ　煮(名)　煮ゆる事。●煮ゆるあんばい。○「煮ねが足らぬ」

にへどの　贄殿(名)　昔し禁中に在りたる御殿の名。諸國より貢物にしたる魚鳥を料理するところ

にへがり　贄狩(名)　にへを取るために催す鷹狩。

にへかへる　(自動四段)　煮て沸きかへる。煮にあがるの。〔二〕に同じ。

にえあがる　(自動四段)　〔一〕煮ねて沸騰する。〔二〕煮ねて沸騰する。

にえきる　(自動四段)　充分に煮ゆる。●煮ねて熟する。

にえゆ　煮湯(名)　煮ねて切りたる湯。●熱湯。

にへびと　贄人(名)　贄の魚鳥を捕る人。○神樂歌「たが贄人ぞ鳴突きのぼる」

にて　(終)　にてとを重ね用ひたる詞。〔一〕に於て。○「舟にて遊ぶ」〔二〕に依りて。○雨にて延引す」〔三〕に在りて。○「今は返らぬ昔にて」〔四〕に爲して。●に代へて。○「花を着にて酒のむ」〔五〕を以て。○「鉛筆にて書く」〔六〕として。○「旅人にてましませば」

にあひ　似合(名)　似合ふ事。●相應。●適當。

にあはし　似合(形。形狀言シク活)　似付かはし。●相應なる。

にあがり　二上り(名)　三味線の調子の稱へ。◎二の糸の調子を上げて彈く故の名。○「二上りを彈く」

にあふ　似合(自動四段)　相應する。●適當する。●ぴったあてはまる。

にあげ　荷揚(名)　船に積みたる荷を陸に揚ぐる事。

にさい　二歲(名)　〔一〕生れてまだ二三歲なりとの意。少年を嘲る時に云ふ詞。○「青二歲」〔二〕生れて二年を經たる魚。

にざかな　煮着(名)　煮附の魚。

にき　二季(名)　二つの季候。多くは春秋二季の事に用

ふ。

にき 日記(名) にっきの略。(雅)

にき 二氣(名) 陰と陽との氣。

にき (助動) 過去の詞のにときと重ね用ひたるもの。○「語りにき」「過ぎにき」

にぎ 和柔(名) なぎなごにごなど皆同語。◎やはらかなる。●精なる。……粗なるの反對。●熟したる。

にぎにぎし 賑々し(形。形狀言シク活) 賑はしに同じ。

にきどり 二季鳥(名) 雁の異名。

にぎり 握(名) 〔一〕握る事。〔二〕握りたるもの。〔三〕弓射る時に其左手にて握るところ。●弓束。

にぎりかはヮ 握革(名) 弓の握りに卷きたる革。

にぎりこぶし 握拳(名) 握りかためたる拳。●げんこつ。

にぎりめし 握飯(名) 握りたる飯。●むすび。

にぎりずし 握鮓飯(名) 握りて作りたる鮓飯。

にぎる 握(他動四段) 〔一〕物を五本の手の指の内に入れて持つ。●つかむ。〔二〕手に握る如く我所有とする。○「天下を握る」「萬金を握る」

にぎはひィ 賑(名) 賑ふ事。●にぎやかさ。●繁榮。

にぎはふフ 賑(自動四段) にぎはしくある。●繁昌する。●富む。

にぎはし 賑し(形。形狀言シク活) にぎはしに同じ。

にぎはす 賑(他動四段) にぎはすに同じ。

にぎはし 賑(形、形狀言シク活) 〔一〕人などの多く集りて繁榮する有樣。●にぎやかな。〔二〕富有なる有樣。

にぎはす 賑(他動四段) 〔一〕賑はしくする。〔二〕富むやうにするの意にて。◎救ひ恤む。

にぎたま 和魂(名) 溫和なる時の魂。……怒り荒ぶる時の魂を荒魂といふに對して。

にぎたへエ 和妙(名) やはらかなる織物。……荒妙の對。(古)

にぎむ (他動上二段) にきぶに同じ。

にきのはこ 日記箱(名) 日記を入れ置く箱。(源氏)

にきのからびつ 日記辛櫃(名) 日記を入れ置く辛櫃。(狹衣)

にぎやかに (副) にぎはしく。

にぎやかなる (形) にぎはしき。

にぎぶ (他動上二段) 和の字をはたらかせたる詞。◎馴れ睦びたる。○萬葉「にぎびにし家を離

にぎて　りて」
和幣(名)　にぎたへの約音。〔一〕神に奉る和妙。●和妙の幣帛。〔二〕後世は紙にて作りたる幣をも云ふ。○「青和幣」「白和幣」

にぎめ　和布(名)　海草の名。―若和布に同じ。

にきみ　(名)　人の顔に數多く生ずる小さき腫物。

にぎみたま　和魂(名)　にぎたまの尊稱。おもに神靈の上に云ふ。

にぎしね　和稻(名)　米に採りたる稻。……荒稻の對。

にきび　(名)　(古)　にきみに同じ。

にゆ　煮ゆ(自動下二段)　煮たるもの、熟する。●涌く。

にう　乳(名)　ちち。●熱する。

にふゐん　入院(名)　治療のため病院に入る事。△(動)―入院す。

にふらう　入牢(名)　牢に入る事。△(動)―入牢す。

にふばい　入梅(名)　梅雨に入る時節。●つゆの入り。……誤りては梅雨中の意に用ふ。

にうはち　乳鉢(名)　藥を細末にし又は練る陶器もしくは硝子の鉢。

にうぼ　乳母(名)　乳を小兒に呑ますする役の女。●うば。●めのと。

にうぼう　乳棒(名)　乳鉢にて藥を練り又は細末にする棒。

にふぼく　入木(名)　書法の名。……じゅぼくを見よ。

にふとう　入湯(名)　湯に入る事。●入浴。

にふだう　入道(名)　〔一〕佛道に入る事。……多くは男女に限らず貴族の剃髮して僧尼と爲れるを云ふ。〔二〕入道したる人。○「入道の帝」「入道の宮」「入道殿下」「法成寺入道」△(動)―入道す。

にふだうしんわう　入道親王(名)　法親王に同じ。

にふてう　(名)　外國人の我國に來る事。△(動)―入朝す。

にふぢやう　入場(名)　其場處に入る事。△(動)―入場す。

にふぢやう　入定(名)　死去。……多くは大師、上人の如き人に用ふ。△(動)―入定す。(佛教)

にうわ　柔和(名)　やさしき事。●にこやかなる事。

にうがん 乳癌(名) 乳房に出來る腫物の名。

にふがく 入學(名) 入校。●入門。△(動)—入學す。

にうのかゆ 乳粥(名) 牛乳を製したるもの。●酪。

にふよう 入用(名) 〔一〕入り用。●所用。〔二〕入費。●費用。

につ 入津(名) 舟の港に入る事。

にふないすずめ 入内雀(名) 雀の種類。腹白く背赤くして小さき鳥。

にふなみ (名) にひなめの轉。(萬葉東歌)

にふくわ 入花(名) 俳諧の點をする宗匠への添削料。

にふくわい 入會(名) 其會に加入する事。△(動)—入會す。

にふくわん 入棺(名) 死骸を棺に納むる事。●納棺。

にふふ 入府(名) 其府に入る事。……昔ならば駿府甲府の類。今ならば東京京都大坂の三府。

にふぶ 入夫(名) 夫の死したる妻の家に聟となりて行く事。●入聟。

にふぶ 入部(名) 領主の任命後はじめて其國に入る事。●入國。

にふかう 入校(名) 學校に入る事。△(動) 入校す。

にふこう 入貢(名) 外國人の我國に來りて貢物を奉る事。△(動)—入貢す。

にふこく 入國(名) 昔し領主の任命後始めて其國に入る事。△(動)—入國す。

にふごく 入獄(名) 入牢に同じ。△(形)—入獄す。

にふさつ 入札(名) いれぶた。●投票。

にふきん 入金(名) 拂ひ込みたる金錢。●受取りたる金錢。

にふぎん 入銀(名) 入金に同じ。

にふめつ 入滅(名) 死去。○「釋迦の入滅」△(動)—入滅す。(佛教)

にふめん 入麺(名) にめんの延音。(○)煮たる索麺。

にふじゃく 柔弱(名) 氣力の虛弱。=じゃうじゃくに同じ。

にふし 入手(名) 我手に入るゝ事。●受取。△(動)—入手す。

にうし 乳臭(名) 幼くして乳のにほひのまだ失せぬ事。……多くは。年齡の若きを自ら謙遜し。または同じ意味にて他を嘲りて云ふ。

にうじふ 乳汁(名) ちゝしる。=ちゝまたにう

に同じ。……多くは牛乳に云ふ。

にふじゅく 入塾(名) 學生の寄宿舍に入る事。△(動)—入塾す。

にふひ 入費(名) 費用。●物入り。

にふもん 入門(名) 其人の門人と爲る事。●入學。

にし 西(名) 〔一〕日の入る方角。〔二〕西風の略。〔三〕西方にある佛の世界。〔四〕西本願寺の略。

にし 螺(名) 貝の名。赤螺、田螺の類。

にし (助動) 過去の詞の。にさしさを重ね用ひたるもの。○「さては去りにし古へのの」

にじ 虹。霓(名) 空氣中の水分に反射せし日光が五色の弓形を爲して現はるゝもの。

にじ 二時(名) 時の名。一時より二番目の時刻。

にじ 二字(名) 〔一〕實名。●名乘。◎昔は義經清正の如く二字を常とせし故に云ふ。〔二〕名簿。●なづき。◎實名を書きて贈る故に云ふ。

にしどち (名) 地虫(ちむし)の土中にて蛹(さなぎ)となりたるもの。◎小兒此虫を捕へて。西どっち東どっちと稱へ。其腰から下を左右に動かすを見て樂しむ事ある故に名づく。

にしぢん 西陣(名) 西陣織の略。

にしぢんたり 西陣織(名) 京都の西陣にて織り出だす絹布の織物。綾錦など種々あり。

にじりがき (名) にじるやうなる文字の書き方。

にじりよる (自動四段) じり〳〵と近づく。

にしる 煮汁(名) 物を煮出したる汁。

にじる 蹂(他動四段) 物を壓し附けつゝ動かすやうの働。○「踏みにじる」

にしほのあゆ 煮鹽鮎(名) 煮たる鹽鮎。(江家次第)

にしたもて 西面(名) 西面(せいめん)の武士。近古時代に院の御所を守護したる兵。

にしがはゞ 西川(名) 西方の川。特には京都の大井川桂川を云ふ。

にしょう 二腫(名) 詩學上韻字の一。……ゐんの處を見よ。

にせうう 二蕭(名) 詩學上韻字の一。……ゐんの處を見よ。

にしょうう 二障(名) 一に煩惱障。二に所知障。(佛教)

にしむ 煮染(他動下二段) 醬油の染み込むまで煮る。

にしん 鯡(名) 鰊(ほう)に似て小さく味に澁みある魚。我國東北の海に多し。其子は即ち數の子。

にしん 貳心(名) ふたごゝろ。

にしん 二親(名) 兩親。●父母。

にしん 二身(名) 一に分段身。二に應身。(佛教)

にじん 二伸(句) 二白を見よ。

二神(名) 二柱の神。特には伊非諾伊非册の二神を云ふ。○謠曲「二神出世のいにしへ」

にじむ (自動四段) 濡れたる紙に字など書く時その墨の亂れ散るか如き働を云ふ。

にしのうち 西内(名) 紙の名。大きさも厚さも美濃紙より優りたるもの。

にしのうみ 西海(名) 西方の海。特には京都より西なる九州四國山陽等の海を云ふ。

にしのあるじ 西主(名) 西方淨土の主。阿彌陀如來を云ふ。

にしやま 西山(名) 西方の山。特には京都の嵐山の山つゞきすべてを云ふ。

にして (後) にて。●に於て。●に在りて。

にしき 錦(名) 〔一〕織物の名。五色の糸にて美しき模樣を織り出だしたる絹布。〔二〕錦に似たるもの。〔三〕又それより起りて總べて美麗なるもの。○「紅葉の錦」「錦の衣」

にじき 二食(名) 一日三度の食事を二度にする事。

にしきべり 錦緣(名) 錦にて造りたる疊の緣。

にしきへみ 錦蛇(名) にしきへびに同じ。

にしきへび 錦蛇(名) 錦の模樣ある蛇。

にしきどり 錦鳥(名) 〔一〕赤雉の一名。〔二〕鹿の異名。

にしきがはゥ 錦革(名) 地を紫にし模樣を白くしたる革。昔し貴人の專用せしもの。

にしきた 西北(名) 〔一〕西と北との間。●乾の方角。〔二〕其方より吹く風。

にしきだひィ 錦鯛(名) 鯛に似て錦の如き鱗ある魚。

にしきづた 錦蔦(名) 草の名。葉の先の紅白に染む蔦。

にしきゑ 錦繪(名) 板にしたる美しき彩色繪。……多くは浮世繪をかきたるものにて一枚、二枚つゞき三枚つゞきなどあり。

にしきで 錦手(名) 五色にて模樣を畫かきたる陶器。

にしきぎ 錦木(名) 一尺位の木を斑に彩色せるもの。昔し陸奥の國の風俗にて男女を戀慕する時。此錦木を其女の家の外に立つるに。逢はんと思ふ男ならば之を取り入れて從はんの意を示し。逢ふまじと思ふ時は取り入れずに置けば。跡より〳〵持ち來ていつまでも之を立て續け。遂に其數千束に及ぶ時。

女は男の志の誠に深きを知りて始めて心をゆるすといふ。故に錦木の歌に千束とよめる事あり。○後拾遺「錦木は立てながらこそ朽ちにけれけふの細布胸合はじとや」詞花「いたづらに千束くちにし錦木を猶こりずまに思ひ立つかな」

にじふ 二十(數)　〔一〕十の二倍。〔二〕はたち。〔三〕第二十番目。

にじふいちたいしふ 二十一代集(名)　歌集の名。八代集に十三代集を合せたるもの。

にじふいっか 二十一箇(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

にじふいっし 二十一史(名)　支那歷史の名。十七史に遼史、宋史、金史、元史を合せたるもの。

にじふろくやまち 廿六夜待(名)　陰曆の正月七月の廿六日の夜の月は彌陀三尊の形を現ずるとて其出づるを待ち拜する事。

にじふはちかん 二十八勘(名)　詩學上韻字の一つ……ぬんの處を見よ。

にじふはっしゃ 二十八舍(名)　二十八宿に同じ。

にじふはっしゅく 二十八宿(名)　支那古代の天文學にて分ちたる二十八區の星の宿り。すなはち東方には角、亢、氐、房、心、尾、箕。北方には斗、牛、女、虛、危、室、壁。西方には奎、婁、胃、昴、畢、觜、參。南方には井、鬼、柳、星、張、翼、軫。

にじふにば 二十二禰(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

にじふにしゃ 二十二社(名)　山城京都の王城を守護する二十二箇の神社。すなはち伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、大原野、春日、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生川上、貴船。

にじふりくいう 二十六宥(名)　詩學上韻字の一つ……ぬんの處を見よ。

にじふくえん 二十九豔(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

にじふごぼさつ 二十五菩薩(名)　人の死して極樂に生れんとする時。之を擁護し迎ふる爲め彼國より阿彌陀如來の遣はさるゝ二十五體の菩薩。すなはち觀世音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、師子吼、陀羅尼、虛空藏、

にじふかう

にじふごう

にじふさんやう

にじふしちしん

にじふしけい

にじふしき

にじふごけい

にじふてん

德藏、寶藏、金藏、金剛藏、光明王、山海惠、花嚴王、珠寶王、月光王、日照王、三昧王、誠自在王、大自在王、白寓王、大威德王、無邊身。

二十號(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

二十五有(名)　二十五所の世界。すなはち一に須彌山の四州(四所)、二に修羅、餓鬼、畜生、地獄の四惡趣(四所)、三に四王、忉利、夜摩、都率、他化自在、樂變化の六欲天、(六所)、四に梵天(一所)、五に無想天(一所)六に五那含天(一所)、七に四禪天(四所)、八に四無色(四所)。(佛教)

二十五徑(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

二十天(名)　佛法守護の天神に二十種あり左の如し。(佛教)

一、梵天王　二、帝釋天主
三、毘沙門天主　四、提頭賴吒
五、毘留勒叉天王　六、毘留博叉天王
七、金剛密迹天　八、摩醯首羅天
九、散脂大將　十、大辨天
十一、功德天　十二、章天將軍
十三、堅固地神　十四、菩提樹神
十五、鬼子母天　十六、摩利支天
十七、日宮天子　十八、月宮天子
十九、娑竭羅龍王　二十、闍摩羅天

二十三樣(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

二十七沙(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

二十四敬(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

二十四氣(名)　四季の季節の循環を曆にて云ふ詞。月の五日間を一候と稱へ。三候を一氣と稱ふ。二氣一月と爲り十二月二十四氣と爲る。其二十四の名稱は左の如し。(陰陽の文字は陰曆陽曆の略。二、三の如きは二月三日の略と知るべし)

春
- 立春　陰、正月節　陽、二、三
- 啓蟄　陰、二月節　陽、三、五
- 清明　陰、三月節　陽、四、五
- 雨水　陰、正月中　陽、二、十八
- 春分　陰、二月中　陽、三、二十
- 穀雨　陰、三月中　陽、四、二十

夏
- 立夏 陰、四月節 陽、五、五
- 芒種 陰、五月節 陽、六、五
- 小夏 陰、六月節 陽、七、七
- 小滿 陰、四月中 陽、五、廿一
- 夏至 陰、五月中 陽、六、廿一
- 大夏 陰、六月中 陽、七、廿三

秋
- 立秋 陰、七月節 陽、八、七
- 白露 陰、八月節 陽、九、七
- 寒露 陰、九月節 陽、十、八
- 處暑 陰、七月中 陽、八、廿三
- 秋分 陰、八月中 陽、九、廿三
- 霜降 陰、九月中 陽、十、廿三

冬
- 立冬 陰、十月節 陽、十一、七
- 大雪 陰、十一月節 陽、十二、七
- 小寒 陰、十二月節 陽、一、五
- 小雪 陰、十月中 陽、十二、廿二
- 冬至 陰、十一月中 陽、十二、廿二
- 大寒 陰、十二月中 陽、一、廿

にしゅしき

二種識(名)　一に顯識。二に分別識。(佛教)

にしめ

煮染(名)　芋、牛蒡、胡蘿蔔、蓮根、蒟蒻、燒豆腐の類を煮染むる事。又は其煮染められたるもの。

にしめもの

煮染物(名)　煮染めたるもの。

にしみなみ

西南(名)　西と南との間。●坤(ひつじさる)の方角。

にしび

西日(名)　西に傾く日。●夕日。●入日。

にび

鈍(名)　黑ばみたる色の名。其濃きものは黑と爲り薄きは鼠色と爲る。……此染め色は中古。裏服、僧尼の服、左遷せられし人の服などに用ひたるもの。喪服に用ふる時は其色の濃きほど尊親の深きを表はすの習とす。

鈍色(名)　にびを見よ。

にびいろ

煮浸(名)　魚を煮て其汁に浸し置く事。又は其魚。○「鯡の煮びたし」

にびたし

二百廿日(名)　立春の一日より二百廿日目の日。農家との關係は二百十日に同じ。

にひゃくはつか

二百十日(名)　立春の節より二百十日目に當りたる日。今の暦にては大凡九月一日に當れり。農家にては早稻の花の咲き揃ひたる頃とて此日に風雨あるを大に憂慮す。

にひゃくとをか

荷物(名)　荷に同じ。

にもつ

煮物(名)　煮染(にしめつけ)煮附の總名。

にもの

贋(名)　似せるもの。●摸造品。●僞物。

にせ

二世(名)　現世と未來の世と。○「二世の契」

にせ

似せ書(名)　其人の手蹟に似せて書く事。

にせがき

似せ病(名)　假病(けびやう)。●作病。

にせやまひ

似せ筆(名)　其人の手蹟に似せて書く事。

にせふで

似せ繪(名)　似顏繪。●肖像。

にせゑ

にせあんらく　二世安樂（句）　現世と來世との安樂を得るをいふ。○謠曲「二世安樂のため天王寺にて一七日施行を引き候」（佛教）

にせもの　贋物（名）　僞物。

にす　似す（他動下二段）　〔一〕似るやうにする。●似せる。〔二〕まねて作る。

にすゐ　二水（名）　漢字の偏の名。冰冷などの字の左の部分。……漬、淚等の左なるを三水と云ふ。

にずり　丹摺（名）　赤土にて摺りたる衣。（古日）